



<パネルディスカッション「借用語と日本社会」> 借用と外来語と社会

著者	田川 拓海
雑誌名	日本語と日本文学
巻	66
ページ	3-5
発行年	2020-08-31
URL	http://doi.org/10.15068/00162325

パネルディスカッション

「借用語と日本社会」

借用と外来語と社会

田川 拓海

一・パネルセッションの概要

第四十二回大会パネルディスカッションのテーマは「借用語と日本社会」である。日本語および日本文学の様々なトピックに登場する借用について、漢語、外来語、そして言語の教授法を取り上げ、言語学、文学、教育学のそれぞれの視点から四つの発表を提示し、それらを元に討論を行った。

「外来語の文法研究・形態論研究」（田川拓海）では、「借用（語）」「漢語」「外来語」といった基本的な用語の整理と外来語の研究に関するいくつかの論点と現象が紹介された。「外来語受け入れの現状について」（林廷修）および『伊勢物語集註』における漢語の借用（安倩）では、それぞれ対象とする範囲・資料は異なるものの、丹念な調査を元に外来語および漢語の使用がどのようになっていたか、なっているかを明らかにした。また、「グアンの教授法を借用した山口喜一郎の日本語教授法―台湾の実践から韓国の実践まで」（金ボイエ）では、言語そのものではなくその教授法の借用について、やはり教科書等の詳細な調査を元にその実態を描き出している。

一口に「借用」と言っても、ある枠組みから別の枠組みに要素や概念、方法論等を「借りる」場合、元の性質を保持するこ

とは基本的に難しい。たとえば、言語学における「借用」の定義を見ると、次のようになっていいる。

二つの言語AとBにおいて、言語Aの要素を模倣・複製することにより、言語Bに新しい形式が生じたり、従来からある形式に新しい意味が生じたりする場合、言語Bにおけるこれらの変化を借用と言う。

（田口二〇一五、一〇九頁）

すなわち、「借用」はあくまでも「借りられる側」ではなく「借りる側」の現象なのであり、言語であれば、借りる側の言語の性質に合わせて形式も意味も借りられる言語にあるものとはかなり異なったものになることも珍しくない。

借用においてどのような「変化」が起こるのかということについては、何らかの傾向や規則性も分かっている一方、言語や文化が対象の場合、様々な要因が関わることで複雑な事例や現象も少なくない。事実を明らかにするには丁寧な調査が必要となるが、借用の研究では大体の場合借用元と借用先の両方を調べなければならなくなるため、調査のコストも大きくなっ

てしまうという難しさがある。

本パネルセッションのそれぞれの発表において示された様々な事例と調査結果は、そのような困難に対してそれぞれの研究分野がどのように対峙することができているのかという問いに対する回答となっただけではなく、人文社会系の研究において洗練されてきた資料やデータを丁寧にかつ徹底的に調べる方法論の重要性も示していると言うことができるであろう。

二. 外来語と社会

借用の研究と社会の関わりという点から、外来語の問題について簡単に述べておきたい。

特に専門用語等の新しい語として外来語が用いられる場合、それが外来語であることの問題に焦点が当てられることがある。確かに馴染みのない語から借用した外来語は意味・用法を推測しにくいことも珍しくなく、外来語の使用を避けてほしいという主張がなされるのは当然のことであろう。情報保障という点から見ても外来語への対応が必要な場面はあり、たとえば「やさしい日本語」では外来語の使用が避けられ他の表現で言い換えられたりすることがある。

しかし一方で、外来語の言い換えはあらゆる場面・語に対して簡単に適用できるわけではない。かつて国立国語研究所が推進したいわゆる「外来語言い換え提案」について、田中（二〇一六）は次のように述べている。

の対応策のうち、定着していない外来語を言い換える対応策は、専門的な重要概念を表す外来語を除き、確かに効果を上げ、問題が軽減しているとみて良い：（中略）
：一方、それらの対応策では十分な指針が示されなかった、定着が進んでいる外来語については、それが表す意味をどう表現すればわかりやすく伝わるのか、対応が難しく、問題が大きい

（田中二〇一六、九頁、傍線は田川）

外来語には、「基本語化」（金二〇一六等）しているものも多く、日本語に定着したものはかえって他の語種で言い換えるのが難しいものもある。

さらに、言い換えという手法については次のように、言い換えることが誤解につながるという問題点の指摘もあり、ここでは説明を付すことが必要であると提案されている。

哲学を専門とする古田徹也氏（東京大学）は *close contact* のような専門語を安易にわかりやすい「濃厚接触」といった語に置き換えることに警鐘を鳴らしている（朝日新聞デジタル二〇二〇年四月二十一日）。「濃厚接触」では食卓を囲んだおしゃべりを連想できず、全く危険と思わずにそうした営みを続けた人々が当初は多くいたのではないか、という趣旨である。同様に「ロックダウン」は単なる「都市封鎖」ではなく、「ソーシヤルディスタンス」も「社会的距離」と訳すと貧富の差や差

国語審議会や国立国語研究所が提示した、外来語問題へ

別を連想させるとしている。社会言語学的に見れば、意味が全く同じであればどちらか一つが生き残り、もう一方は淘汰されるのが普通であるが、多少なりとも異なれば使い分けられてどちらも生き残ることになる。ただ、いずれにしても「濃厚接触」のように誤解を生みやすい語は、報道の初期にはわかりやすく説明を入れてほしいと思う。

(松下二〇二〇、傍線は田川)

言い換えに言及されていることにも現れているが、松下(二〇二〇)が取り上げているいわゆる「新型コロナウイルス(感染症)」関連の新語・流行語のうち外来語に当たるものは多い。そもそも「コロナ」が外来語であるが、そのほかにも「COVID-19」「クラスター」「オーバーシュート」「ロックダウン」「ソーシャルディスタンス」「ステイホーム」「オンライン〇〇」「テレ〇〇」「リモート〇〇」「ニューノーマル」等が挙げられている(二部簡略化、混種語は除く)。

この件については感染症はできるだけ早い対応・対策が求められるという事情も関係しているかもしれないが、新しい問題が発生した場合に特に専門用語由来で複数の外来語が急に使われるようになるということは今後も起き得るであろう。外来語をどのように使うかというのは専門家だけで決められることではないが、言語の研究としてできることとしては、今何が起きているのか事実の記録を行うこと、関連する資料の保存や整理、調査を行うこと、過去に借用語、外来語がどのように使わ

れてきたのか、借用、外来語にはどのような性質があるのかということについての知見や研究成果の提供、などが挙げられる。

参考文献

- 金 愛蘭(二〇一六)「語彙の周辺部から中心部へ「進出」する外来語——抽象的な外来語の基本語化——について」『日本語学』三五巻七号、一二二頁、明治書院。
- 田口善久(二〇一五)「借用」斎藤純男・田口善久・西村義樹(編)『明解言語学辞典』一〇九—一一〇、三省堂。
- 田中牧郎(二〇一六)「外来語にどう対応すべきか」『日本語学』三五巻七号、二二頁、明治書院。
- 松下達彦(二〇二〇)「第18回 ことばの時事問題(5)：コロナ関連の新語・流行語」(https://dictionary.sansendo-publ.co.jp/column/goi18_2020/07/01 確認)。

(たがわ たくみ 筑波大学)